広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第59号　2010　279－288

奄美大島龍郷町浦方言の敬語法

― 全国共通語敬語法との比較を通して ―

重　野　裕　美

（2010年10月７日受理）

The Honorific of the Ura Tatusugo Amami Oshima Dialect
― The comparison though the honorific of Japanese common language ―

Hiromi Shigeno

Abstract: The honorific of the Amami Oshima dialect is rapidly advanced to the common language, but the systematic research has not been performed yet. This paper aims to describe the honorific term of Ura dialect, and then compare to the honorific term of the Japanese common language. Especially, concentrated in the usage of the verb on honorific expression, humble expression, and polite expression. The result shows that Ura dialect has a characteristic on the honorific verb and verb supplement which is less than Japanese common language. In Ura dialect, there are only a few honorific verb and verb supplement. Mainly suffix of /-jor/ is used to express the polite form of verb or adjective. In the honorific form of the Ura dialect, suffix /-jor/ is frequently used.

Key words: The honorific, Ura dialect, Japanese common language, Suffix of /-jor/
キーワード：敬語法，浦方言，全国共通語，接辞 /-jor/

はじめに

奄美大島方言をはじめ琉球方言において，敬語研究は十分に進んでいない分野の一つである。本稿の目的は，奄美大島龍郷町浦方言（以下，浦方言と略す）を対象として，先行研究を参照としながら，全国共通語（以下，共通語と略す）と対応させ取り出した敬語形式の整理を行い，敬語形式やその用法の特徴を明らかにすることである。具体的には，浦方言にも尊敬語・謙譲語・丁寧語に相当するものが存在するため，それぞれの分類ごとに共通語との比較を通して，形式や用法の観点から共通点や相違点を述べる。

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。
審査委員：町　博光（主任指導教員），佐々木勇，
高永　茂，多和田眞一郎

浦方言では，様々なレベルで共通語化が進んでいるが，敬語法に関してはさらに共通語化が進んでいることがこれまでの敬語法調査[1]から判明している。敬語の運用能力となると，60歳代以下の方言話者は困難を伴う状況である。敬語がうまく操れない中年層からは，「方言の敬語はとても難しい。間違った使い方をしてしまい，年配の方からよく怒られる。だから失礼のないように無難な共通語の敬語を使う」との意見が多く聞かれる。この中年層が感じている敬語の「間違った使い方」とは，具体的にどのような違いを指しているのだろうか。敬語法の世代差についても触れる。

本稿の構成は以下の通りである。２節では，これまでの先行研究について述べ，３節で，調査の概要や本稿で用いる表記法について説明する。中心は４節であり，尊敬語・謙譲語・丁寧語ごとに，共通語との対比から浦方言の特徴を整理する。５節では，４節で述べた内容を概略し，敬語形式の承接関係や敬語形態素

/-jor/ の隆盛，敬語法全体を通しての浦方言に特異な特徴について述べる。また６節では，世代差が顕著に表れた丁寧語の用法について取り上げ，中年層の敬語の「間違った使い方」の要因について考察する。最後に７節で，これまでのまとめと今後の課題・発展について述べる。

２．先行研究

琉球方言の敬語法の先行研究として，早くから金城（1931）や岩倉（1932）があり，奄美大島方言のものとして，長田他（1980），柴田（1984），寺師（1985）があげられる。また，『全国方言資料』（1972）や『琉球の方言』（1976），藤原（1978-79），『方言文法全国地図』（2006）などの自然談話資料や方言文法地図などから敬語形式を採集することはできる。しかし，それらには項目に偏りがあり，体系的な比較は困難である。

敬語の体系的な記述を意識したものとしては，仲宗根（1976），町（1984）（1997），西岡（2002）（2003）などがあげられる。本稿では，浦方言敬語法の動詞に関する形式を中心に概説する。

３．調査の概要

本稿では，奄美大島調査から得られた資料のうち，より詳細で均一な資料が得られた[2] 浦方言を対象として考察を進める。

3.1. 対象地域

奄美大島は，鹿児島から南へ380km，沖縄本島から北へ300km に位置しており，年間平均気温が21.3度の亜熱帯気候の島である。周囲405km，面積719.82km^{2}である。行政区画上は鹿児島県に属するが，言語や文化などは沖縄県と同様の琉球文化圏となる。平成の大合併の前は，北から順に笠利町・龍郷町・名瀬市・住用村・大和村・宇検村・瀬戸内町の７市町村であった。現在は，笠利町・名瀬市・住用村が合併し奄美市に名称を変更している。

今回対象とする龍郷町浦方言は，琉球方言の下位区分である奄美大島方言に属する[3]。さらに，奄美大島方言[4] は北部奄美大島方言と南部奄美大島方言に分けることができ，龍郷町浦方言は北部奄美大島方言の一つである。

3.2. 調査対象者

本稿で扱う資料は，龍郷町浦集落出身の女性（調査時82歳）から得られたものである。また，６節では世代差を扱うが，中年層は浦集落出身の男性（調査時58歳）から得られたものである。両者は，両親も浦集落の出身者であり，他地域への居住歴も少ない。

これまでの調査や話者の内省より，性差は特に認められないため，本稿では区別なく扱う。

3.3. 調査方法

浦集落の調査は2008年12月から2009年９月の間で，計５回行っている。調査は，共通語の質問文を調査者である筆者が読み上げ，それを方言に翻訳してもらう方法を採った。話者が質問文の共通語に誘導されている可能性も考えられるが，実際の発話に近い回答が得られているものとする。

質問票は，これまでの先行研究や辞書による報告や，共通語敬語法として体系的な記述がなされている菊地（1994）を手がかりに，項目を選定した。

場面は，聞き手や第三者として「（近所の）目上」「親しい友人」「（近所の）目下」を設定している。「（近所の）目上」は，浦集落の全世代で「敬語を使わなければならない人物」として有効な「先生」を選定している。「先生」は，話者より年齢が上の人物を想定してもらった。また「親しい友人」と「（近所の）目下」は，ほとんど同形式の回答が得られ，待遇差は特に認められない。そのため，「親しい友人」と「（近所の）目下」は「目下」としてまとめられる。すなわち，浦方言は年齢による「目上（年上）」「目下（同等・年下）」の２項対立が主な敬語法の使い分けの基準である[5]。

3.4. 表記方法

本稿では，現段階における形態素分析に基づいた文例を提示し，音韻表記で示す。奄美大島方言の母音は，/a，i，u，e，o/ の５母音の他に，２個の中舌母音 /ï, ë/ を持つ。また，母音には語頭で喉頭の緊張を伴う声門閉鎖音があり，その有無が語の意味の対立にも関わる。半母音も同様である。子音にも喉頭に緊張を伴う喉頭化子音があり，その有無による対立が存在する。伝統的な表記法では，母音と半母音などの前に立つ声門閉鎖音と，子音音素の破裂音や破擦音に認められる喉頭化子音などは区別して表記されるが[6]，本稿では両者の「喉頭に緊張を伴う音」という共通性から，その有無を /ʔ/ 対 /ø/ で表す。また，撥音は /ɴ/[m, n, ŋ, ɴ], 促音は /Q/, 長母音は母音連続として示す（例：/aa/[a:]）。

また，例文は語境界ごとにスペースで表示し，「=」は接語境界，「-」は接辞境界を意味する。例文の下には形態素の文法的意味であるグロスをつけ，その下に共通語訳を示す。

例）wutuutu=ja　gaQkoo=ccji　ʔik-jur-i.
　　弟＝は　学校＝へ　行く-不完了-終止形1[7]
　　（弟は学校へ行く。）

以上の表記法により，方言の例文を提示し，この分析に基づいた敬語形式の考察を述べる。例文は全て調査から得られた回答である。

4．奄美大島浦方言の敬語法

本節では，共通語に対応させて得られた敬語形式とその用法について述べる。敬語形式は大きく２つに分けられる。共通語の「行く」が「いらっしゃる」のように不規則な対応をする敬語形式を「自立形式」，「読む」が「～なさる」などを付加して「読みなさる」のように，動詞から規則的につくられる敬語形式を「付属形式」と本稿では呼ぶことにする。

4.1. 尊敬語

尊敬語は「話手が主語を高める表現」（菊池 1994: 93）と定義されている。以下，自立形式と付属形式に分け，その特徴をみていく。

4.1.1. 尊敬語の形式

表１は，「聞き手＝行為主体」に対する敬意を表す場面である。各動詞から，どのような尊敬語形式がつくられるかを比較する。共通語の付属形式は「～なさる」「～ていらっしゃる」を代表として示す。さらに浦方言は，敬語形態素を取り出し表の右端に示す。

表１より，浦方言の尊敬語は次のような形式をつくることが分かる。

〈自立形式〉
ʔimor-i（行く・来る・居る・言う・死ぬ）
misjor-i（食べる・飲む）
uzumjur-i（起きる）

〈付属形式〉
動詞の連用形＋ -ɴsjor
動詞のテ形＋ -mor

浦方言の自立形式は共通語より少なく，３語であった。共通語の「いらっしゃる」に相当する /ʔimori/ は，「行く」「来る」「居る」の他に「言う」「死ぬ」の意味の自立形式である点も共通語とは異なる。

付属形式は，動詞の種類に関わらず /-ɴsjor/ と /-mor/ の２形式である。/-ɴsjor/ は動詞の連用形に後接し，共通語の「～なさる」に相当する。/-mor/

表１：全国共通語と奄美大島浦方言の尊敬語

	全国共通語		奄美大島浦方言			
	常態	尊敬語形式		常態	尊敬語形式	
						敬語形態素
自立形式	行く	いらっしゃる	自立形式	ʔikjuri	ʔimori	ʔimor
	来る	いらっしゃる		kjuri	ʔimori	ʔimor
	いる	いらっしゃる		uri	ʔimori	ʔimor
	死ぬ	お亡くなりになる		sizjuri	ʔimori	ʔimor
	言う	おっしゃる		ʔjuri	ʔimori	ʔimor
	食べる・飲む	召し上がる		kamjuri	misjori	misjor
	起きる	お目覚めになる		mï samjuri	uzumjuri	uzumjur
	知っている	ご存知だ	付属形式	sicjuri	sicjimori	-mor
	みる	ご覧になる		misjuri	miɴsjori misimori	-ɴsjor -mor
	着る	召す		ʔkicjuri	ʔkiriɴsjori ʔkicjimori	-ɴsjor -mor
	する	なさる		sjuri	siɴsjori simori	-ɴsjor -mor
付属形式	読む	読みなさる 読んでいらっしゃる		jumjuri	jumiɴsjori judïmori	-ɴsjor -mor
	寝る	休みなさる 休んでいらっしゃる		nïburjuri	nïburiɴsjori nïbutïmori	-ɴsjor -mor
	書く	書きなさる 書いていらっしゃる		ʔkakjuri	ʔkakiɴsjori ʔkacjimori	-ɴsjor -mor
	くれる	くださる		ʔkurïrjuri	ʔkurïɴsjori	-ɴsjor

は動詞のテ形に後接し，共通語の「～ていらっしゃる」に相当する。また，/-ɴsjor/ は自立形式を持たない動詞に付加して敬語形式をつくり，/-mor/ は「～ていく」「～てくる」「～ている」などのアスペクトの敬語形式をつくるという機能差が認められる。両者とも，自立形式の /misjori/ と /?imori/ が文法化したものである。以上，共通語と対比させた結果，浦方言は自立形式，付属形式ともに少なく，主に分析的な付属形式が多用されることが相違点として指摘できる。また，共通語の接頭辞「お（御）」「ご（御）」に相当するものをつけて敬語形式にする形式はほとんど認められない。

4.1.2. 尊敬語の用法

表１では対者敬語（「聞き手＝目上」）の場面における敬語形式を確認した。浦方言では「聞き手＝目下」，「第三者＝目上」の第三者敬語の場面でも敬語形式が用いられる。なお，場面による敬語形式の違いはない。

(1)「聞き手＝行為主体（目上）」

naɴ=ja	?aQsja	gaQkoo=ccji	?imo-ɴ=na.
あなた＝は	明日	学校＝へ	いらっしゃる -終止形２＝か

（あなたは明日学校へいらっしゃるか。）

(2)「聞き手＝友人」「行為主体＝目上」

seɴsee=ja	?aQsja	gaQkoo=ccji	?imo-ɴ=na.
先生＝は	明日	学校＝へ	いらっしゃる -終止形２＝か

（先生は明日学校へいらっしゃるか。）

また，共通語では（1）のような「聞き手＝行為主体（目上）」の場面において，「いらっしゃいますか（尊敬語＋丁寧語）」の形式が用いられるが，浦方言では自立形式のみで表す傾向がある。丁寧語接辞 /-jor/ を後接させた /?imor-jor-i/ も可能だが，実際の回答例では少ない。(2) は第三者が「先生」の場面であるが，「身内敬語」も存在するため，目上の行為者が「兄姉」「父母」などであっても尊敬語が用いられる場面である。浦方言話者は「どのように親しくても一歳でも年上だと敬語を使う」という。「親疎」や「ウチ・ソト」の関係よりも「年齢」の基準を優先することが指摘できる。

4.2. 謙譲語

菊地（1994）によると，共通語の謙譲語はその機能により２分類される。一方，浦方言では菊地の謙譲語Ａに対応するものしか謙譲語として認められない。4.2 節では，２分類する必要がないことを指摘する。

4.2.1. 謙譲語の形式

浦方言が，共通語とどのような対応をみせるかを表２にまとめる。菊池（1994）の分類に基づき，謙譲語

表２：全国共通語と奄美大島浦方言の謙譲語

	全国共通語					奄美大島浦方言				
	常態	謙譲語形式				常態	謙譲語形式			
			A	B				A	B	敬語形態素
自立形式	言う	申し上げる	＋		自立形式	?juri	sirareri	＋		sirarer
	見る	拝見する	＋			misjuri	ugamjuri	＋		ugam
	あげる やる	さしあげる	＋			kurïrjuri	?oseri	＋		?oser
	言う	申す		＋	付属形式	?juri	?jori		＋	-jor
	行く	伺う	＋			?ikjuri	?ikjori		＋	-jor
	来る	参る		＋		kjuri	kjori		＋	-jor
	いる	おる		＋		uri	urjori		＋	-jor
	する	いたす		＋		sjuri	sjori		＋	-jor
	知る 思う	存じる		＋		sicjuri	sicjurjori		＋	-jor
	もらう	いただく	＋			moraijuri	moraijori		＋	-jor
付属形式	書いてやる	書いて さしあげる	＋			?kacjijarasjuri	?kacjioseri	＋		-oser

をAとBに分け，「＋」はその機能をもつことを意味している。場面は，「聞き手＝目上」である。自立形式と付属形式に分け，浦方言の敬語形態素を表の右端に示す。

表２より，浦方言の謙譲語は以下のような形式をつくることが分かる。自立形式，付属形式ごとに共通語の謙譲語Ａ・Ｂに対応して得られた形式を示す。

〈自立形式〉

謙譲語Ａ	謙譲語Ｂ
sirarer-i（言う）	
ugamjur-i（会う）	
ʔoser-i（あげる・やる）	

〈付属形式〉

謙譲語Ａ	謙譲語Ｂ
動詞のテ形＋ -oser	動詞の基本語幹＋ -jor

尊敬語と同様，謙譲語でも共通語と比較して自立形式・付属形式が少ない。また，浦方言には，謙譲語Ａ（菊地 1994:210）「話手が補語を高め，主語と低める（補語よりも低く位置づける）表現」に相当するもののみであることが明らかとなった。

付属形式の謙譲語Ａには共通語の「～してさしあげる」に対応する「動詞のテ形＋ -oser」が表れる。共通語のような，授受動詞由来ゆえの「恩着せがましさは感じられない」との意見が話者より得られる。浦方言では，「（お）供してさしあげる」の表現でよく用いられるようだ。

(3) 「聞き手＝補語（目上）」
waN=ga　tomosi-oser-oo.
私＝が　供する．テ形-さしあげる-意志形
（私が（お）供してさしあげよう。）

一方，謙譲語Ｂの付属形式として表れる「動詞の基本語幹＋ -jor」は丁寧語の形式と重なる。丁寧語については4.3節で後述するが，謙譲語Ｂの付属形式に対応した形式と丁寧語の形式が同一であるため，用法に違いが見られるかの考察を4.2.2節で行う。

4.2.2. 謙譲語の用法

前半で謙譲語Ａに対応する用法について，後半で譲譲語Ｂに対応する形式や用法について述べる。例文を提示する際，行為の受け手のことを菊池（1994:210）にならい「補語（主語でない，ある種の文成分。目的語など）」として例文に示す。

ここでは，自立形式の /sirareri/（申し上げる）を取り上げ，その用法を考察する。「聞き手＝補語」の場面で，補語が「目下」と「目上」でどのように言い分けられるかを（4）（5）で確認する。また，第三者の登場する場面で，聞き手が「目下」，補語が「目上」の場合を（6）に示す。（5）と（6）では，対者場面と第三者場面における違いもみる。

(4) 「聞き手＝補語（目下）」
ʔjaa=zji　ʔjii-cjasa-N　kutu=nu　ʔa-N.
お前＝に　言う-たい-連体形　こと＝が　ある-終止形２
（お前に言いたいことがある。）

(5) 「聞き手＝補語（目上）」
naN=zji　sirare-cjasa-N　kutu=nu
あなた＝に　申し上げる-たい-連体形　こと＝が
ʔar-jo-N.
ある-丁寧-終止形２
（あなたに申し上げたいことがあります。）

(6) 「聞き手＝目下」「補語＝目上」
waN=ja　seNseeN=zji　sirare-cjasa-N
私＝は　先生＝に　申し上げる-たい-連体形
kutu=nu　ʔa-N.
こと＝が　ある-終止形２
（私は先生に申し上げたいことがある。）

（4）と（5）では，「言う」の意味の部分が（4）「補語（目下）」の場合は常態の /ʔjuri/，(5)「補語（目上）」の場合は謙譲語Ａに対応する自立形式 /sirareri/ が表れる。(6) は，聞き手が「目下」で「補語（目上）」が第三者の場面である。(5) でも表れた自立形式の /sirareri/ が，「補語（目上）」に対して用いられる。/sirareri/ が聞き手に影響を受けないことが分かる。ゆえに，/sirareri/ は共通語の「申し上げる」と同様の用法を持ち，謙譲語Ａに分類される。

次に，共通語では謙譲語Ｂの形式が表れる場面について考察する。形式は「動詞の基本語幹 +-jor」となり，浦方言の動詞の丁寧語と一致する。謙譲語Ｂとは「聞き手に対する敬語」（菊池 1994:209）である。まず，「聞き手＝補語」の場面を示す。(7) は聞き手が「目下」，(8) は聞き手が「目上」の場合である。

(7)　「聞き手＝補語（目下）」
waN=ja　ʔaQsja　ʔjaa=nu　jaa=ccji
私＝は　明日　お前＝の　家＝へ
ʔik-ju-N.
行く-不完了-終止形２
（私は明日お前の家へ行く。）

(8)　「聞き手＝補語（目上）」
waN=ja　ʔaQsja　naN=nu　jaa=ccji
私＝は　明日　あなた＝の　家＝へ
ʔik-jor-N.
行く-丁寧-終止形２
（私は明日あなたの家へ行きます。）

「目下」の場合は常態の /ʔikjuri/「行く」が,「目上」の場合は「動詞の基本語幹 + -jor」の形式である /ʔikjori/ が表れる。共通語の謙譲語Ｂに対応して表れる /ʔikjori/ は,「参る」などの自立形式ではなく,その語構成は丁寧語の「行きます」に対応して表れる形式と一致する。

次は,第三者が登場する場面で,(9)「聞き手＝目上」で「第三者＝補語（目下）」である場合と,（10）「第三者＝補語（目上）」の場合を見る。

(9)　「聞き手＝目上」「補語（目下）」
waN=ja　ʔaQsja　wutuutu=nu　jaa=ccji
私＝は　明日　弟＝の　家＝へ
ʔik-jo-N.
行く-丁寧-終止形２
（私は明日弟の家へ行きます。）

(10)　聞き手＝目上」「補語（目上）」
waN=ja　ʔaQsja　seNsee=nu　jaa=ccji
私＝は　明日　先生＝の　家＝へ
ʔik-jo-N.
行く-丁寧-終止形２
（私は明日先生の家へ行きます。）

（9）と（10）は，聞き手が「目上」で，第三者の補語が「目下」「目上」の違いであるが，両方 /ʔikjori/ が表れる。これは，（8）の「聞き手＝補語（目上）」にも出てくる「動詞の基本語幹 +-jor」の形式である。やはり，聞き手に影響される敬語形式であることが分かる。

「動詞の基本語幹＋ -jor」の形式は,「聞き手」専用の敬語形式であり，丁寧語の機能を持つと言える。ゆえに，謙譲語Ｂの付属形式に表れた接辞 /-jor/ は，形式だけではなく，用法も「聞き手」への敬意を表すため，丁寧語と機能が一致する。

以上の結果から，浦方言には謙譲語Ａに相当するものしかなく，謙譲語Ｂに対応して表れる形式は，丁寧語だと考えられる。浦方言には謙譲語を分類する必要がないということであり，ただ「謙譲語」とする。西岡（2003:102）によると，沖縄首里方言でも「「謙譲語Ａ」と「謙譲語Ｂ」を機能的に区別する必要がない」との指摘がある。

4.3. 丁寧語

丁寧語は,「話手が（同じ内容を）聞手に対して丁寧に述べる表現」(菊地 1994:293) である。本節では,丁寧語の形式と，用法について述べる。

4.3.1. 丁寧語の形式

丁寧語の形式として,接辞 /-jor/ がある。/-jor/ は,動詞や形容詞の用言系か，名詞や副詞などの体言系かで付加する際の形式が異なる。以下,（11）動詞 /ʔikjuri/「行く」に後接する例と,(12) 名詞 /hoN/「本」に後接する例を示す。

(11)　用言系：動詞の基本語幹＋ jor
waN=ja　ʔaQsja　gaQkoo=ccji　ʔik-jor-i.
私＝は　明日　学校＝へ　行く-丁寧-終止形１
（私は明日学校へ行きます。）

(12)　体言系：名詞＋ darjor
hoN　darjor-i.
本　コピュラの丁寧体-終止形１
（本です／でございます。）

用言系に後接する場合は「基本語幹 +-jor」となり,体言系に後接する場合は,「体言 +darjor」となる。

（12）に表れた /darjori/ は，共通語の「本だ」の丁寧体である「本です／でございます」に対応するため,「コピュラの丁寧体」と言える。その語構成は,「係助詞 du + ari（有り）+ ori（おわる）」と考えられる。接辞 /-jor/ の語源と推察される「おわる」に関しては,5.1節で述べる。/darjori/ の /d-/ に関して,長田(1980:505-506）にも「du ʔarjori《ぞ　あります》の短縮形か」とあり，/d-/ を係助詞 /du/ と推定している。その /du/ に /ʔari/「ある」の丁寧体 /ʔarjori/ が後接していると指摘している。このことから，体言系に後接する /darjori/ から取り出される /-jor/ は，正確には用言系の /ʔari/ に後接しているので，丁寧語の形式として /-jor/ が共通して取り出せる。そのため,本稿では，丁寧語接辞 /-jor/ が，用言系には「用言の基本語幹 +-jor」，体言系には「体言 +darjor」とし

表３：全国共通語と奄美大島浦方言の丁寧語形式

全国共通語		奄美大島浦方言		
常態	丁寧語形式	常態	丁寧語形式	
				敬語形態素
行く	行きます	?ikjuri	?ikjori	-jor
来る	来ます	kjuri	kjori	-jor
いる	居ます	uri	urjori	-jor
ある	あります	?ari	?arjori	-jor
見る	見ます	misjuri	misjori	-jor
する	します	sjuri	sjori	-jor
知る	知ります	sicjuri	sicjurjori	-jor
あげる やる	上げます	?kurĩrjuri	?kurĩrjori	-jor
もらう	もらいます	moraijuri	moraijori	-jor
		?itadakjuri	?itadakjori	-jor

て実現するものとし，/darjori/ のグロスを現段階では「コピュラの丁寧体」とする。共通語訳もその語構成から「でございます」の方が適当な訳となるだろう。

丁寧語は，付属形式のみであり自立形式は見られない。表３に，共通語とそれに対応して得られた浦方言の丁寧語形式を示す。さらに，浦方言は敬語形態素を表の右端に示す。

表３より，浦方言の動詞の丁寧語形式はすべて「動詞の基本語幹＋ -jor」となることが分かる。この形式は，表２の浦方言の付属形式と同一である。

4.3.2. 丁寧語の用法

丁寧語接辞 /-jor/ は，目上が行為主体の場合，その行為を表す動詞に後接することができない。この用法について，先行研究では１人称を主語とした例文が多いためか，指摘がなされていない。単に共通語の丁寧語「ます」に対応するとの記述がほとんどである。

(13)「聞き手＝目下」「第三者＝目上」
*8)seɴsee=nu　gaQkoo=ccji　?ik-jor-i.
先生＝が　学校＝へ　行く-丁寧-終止形１
（＊先生が学校へ行きます。）

(14)「聞き手＝目下」「第三者＝目上」
seɴsee=nu　gaQkoo=ccji　?imor-i.
先生＝が　学校=へ　いらっしゃる-終止形１
（先生が学校へいらっしゃる。）

(13) のように，「目上」が行為主体となる場合，非文となる。(14) のように「目上」の行為を表す場合は，尊敬語の形式を用いなければならない。

共通語と同様の用法としては，「聞き手（目上）」の場合，「人以外の事物」の動作・状態を表す用言系に /-jor/ が後接できることである。(15) と (16) はそれぞれ，「バス」や「雨」の動作や状態について /-jor/ が用いられる例である。

(15)「聞き手＝目上」「話題＝バス」
basu=nu　k-jo-ta.
バス＝が　来る-丁寧-過去
（バスが来ました。）

(16)「聞き手＝目上」「話題＝雨」
?amu=nu　fur-jor-i.
雨＝が　降る-丁寧-終止形１
（雨が降ります。）

また，接辞 /-jor/ は，尊敬語や謙譲語に後接することができる。以下，尊敬語の自立形式・付属形式に後接した丁寧語接辞 /-jor/ の例を示す。

(17) 尊敬語の自立形式に後接する場合
?imor-jor-i
尊敬語（自立）-丁寧語-終止形１

(18) 尊敬語の付属形式に後接する場合
?imori-ɴsjor-jor-i
尊敬語（自立）-尊敬語（付属）-丁寧語-終止形１

以上，浦方言の丁寧語の形式と用法について述べた。浦方言の丁寧語接辞 /-jor/ は，聞き手へ敬意を表す

形式だが，話題の行為主体が「目上」の場合は用いることができないことが特徴である。

5．浦方言の敬語法の特徴

４節では，共通語敬語法との比較を通して，浦方言の尊敬語・謙譲語・丁寧語ごとにその形式と用法について述べてきた。本節では，浦方言の敬語法について概略し，敬語形式の承接関係についても言及する。

5.1．浦方言敬語法の形式

尊敬語・謙譲語には，自立形式と付属形式の両方が存在するが，数語のみ認められる。付属形式は自立形式が文法化したものである。また，共通語では頻出する接頭辞「お（御）」「ご（御）」をつけ敬語形式をつくるものがほとんど認められない。そのため，「美化語」に相当するものも少ない[9]。尊敬語と謙譲語に関して，形式ごとにまとめたものが表４である。

表４：浦方言の尊敬語と謙譲語の形式

	尊敬語	謙譲語
自立形式	ʔimor-i misjor-i uzum-jur-i	sirarer-i ugam-jur-i ʔoser-i
付属形式	連用形＋-ɴsjor テ形＋-mor	テ形＋-oser

丁寧語の形式は以下の通りである。

(19) 用言系の基本語幹＋ -jor
　　体言系 +darjor

浦方言の敬語形式を観察すると，丁寧語接辞としても用いられる接辞 /-jor/ が，尊敬語の自立形式，付属形式にも用いられていることが指摘できる。接辞 /-jor/ は，共通語の古語である「御坐す」や，16世紀ごろ琉球の古代歌謡集成書『おもろさうし』に頻出する「おわる」と関連があるものだろう。仲宗根（1976: 500）は，『おもろさうし』でも補助動詞として用いられる「おわる」が，18世紀ごろ生まれた古典劇「組踊」では意味が変化して「自分の動作や，目下の動作に用いられて，目上の動作には用いられない。もはや，尊敬補助動詞ということは出来ない」と指摘している。浦方言の丁寧語接辞 /-jor/ は，「組踊」の用法と関連性があると考えられる。敬語形式や用法の通時的な変化については，今後の課題としたい。

また，承接規則も共通語と異なる。共通語では同じレベルの敬語を重ねると二重敬語として誤用となるが，浦方言はその制限がない。

(20) ʔimosi-mor-ï.
　　いらっしゃる．テ形-いらっしゃる-命令形

(20) のように，同じ形式の敬語形式を重ねることができる。また，敬語動詞を命令形にして，聞き手である目上に，敬語動詞の命令形のみで用いることもできる。

さらに，自立形式に置換えられる動詞は，付属形式を後接することはできないという制限がある。

以下，(21) に尊敬語の付属形式 /-ɴsjor/ と /-mor/ が，自立形式 /ʔimori/「いらっしゃる」の常態である /ʔikjuri/「行く」に後接した場合を示す。

(21)（再掲）
　　(/ʔikjuri/「行く」の連用形 /ʔiki/ ＋ -ɴsjor)
　　*ʔiki ＋ -ɴsjor → ʔikiɴsjori

　　(/ʔikjuri/「行く」のテ形 /ʔizi/ ＋ -mor)
　　*ʔizi ＋ -mor → ʔizimori

共通語では，「いらっしゃる」の代わりに「行かれる」「行きます」のような付属形式を用いた場合，自立形式に比べて敬度が低くなるが，実現が可能な形式である。浦方言では，「自立形式＋付属形式(ʔimori-ɴsjor)」の組み合わせは可能だが，(21) のように「自立形式(ʔimori)」の代わりに「動詞の常態（ʔikjuri）＋付属形式（-ɴrjor)」の形式で代用することはできない。

しかし，この形式は自立形式と関係する動詞のみであり，自立形式は数語であるため圧倒的に「常態の動詞＋付属形式」の形式が多い。そのためか，現在70歳代の方言話者であっても，80歳代の話者では許容されにくい（21）の敬語形式は許容される傾向にある。

5.2．浦方言敬語法の用法

用法としては，以下の３点が共通語と比較して特異な特徴としてあげられる。

①謙譲語は，共通語の「謙譲語Ａ」に相当するものしかなく，共通語のように分類する必要がないこと。

②用言系の基本語幹に後接する丁寧語接辞 /-jor/ は，聞き手に対する敬語形式であるという機能をもつが，行為主体が「目上」の場合，その行為に対して接辞 /-jor/ は用いることができない。また，体言系に後接する /darjori/ からも /-jor/ が取り出せること。

③身内敬語が存在することから，浦方言では「親疎」や「ウチ・ソト」の基準よりも「年齢」の基準が優先されること。

これまでの考察から，浦方言の敬語法は，共通語のように場面や人間関係を考慮しながら，適切な敬語形式や用法をその度に選定する「相対敬語」というより，人間関係などに左右されない「年齢」という基準が優先され，「目上に対して敬語を用いる」という「絶対敬語」に近い体系と言える。また，６節での中年層の敬語法の変化を含めて考えると，「相対敬語」へ変化していく途中の段階の体系とも言えるだろう。

６．浦方言の丁寧語の世代差

これまで，老年層の敬語法について述べてきたが，中年層において用法の違いが顕著であった，丁寧語接辞 /-jor/ の用法を取り上げる。以下の例は，老年層では非文となるものである。

(13)（再掲）:「聞き手＝友人」「第三者＝目上」

*seɴsee=nu　gaQkoo=ccji　ʔik-jor-i.

先生＝が　学校＝へ　行く-丁寧-終止形１

（＊先生が学校へ行きます。）

一方，現在浦方言では中年層を中心に，70歳代の方言話者でも（13）の用法が非文ではなく，丁寧語の用法として受け入れられつつある。この変化は，共通語の丁寧語「ます」と同様の用法に近く，行為主体とは関係なく，聞き手に対して敬意を表す用法である。ゆえに，「動詞の基本語幹＋ -jor」の用法の変化は，「自分や目下の行為・状態」だけではなく，「目上の行為・状態」についても表すことができ，その用法の範囲を広げつつあることを意味する。

この変化は他にも，自立形式があるため用いることが不可能であった，「常態の動詞＋付属形式」のような分析的な表現が中年層で許容されることとも関連している。次の（21）のように老年層では，自立形式が存在する常態の動詞は，「常態の動詞＋付属形式」の組み合わせが不可能であった。中年層ではこの用法も回答として頻出する。

(21)（/ʔikjuri/「行く」の連用形 /ʔiki/ ＋ -ɴsjor）

*ʔiki ＋ -ɴsjor → ʔikiɴsjori

（/ʔikjuri/「行く」のテ形 /ʔizi/ ＋ -mor）

*ʔizi ＋ -mor → ʔizimori

世代差を比較した結果，浦方言の中年層が用いる敬語形式は，自立形式よりも分析的な付属形式に統一される傾向が指摘できる。その原因として，「目上」の行為に対しても丁寧語接辞 /-jor/ が用いられることで，接辞 /-jor/ の使用可能な場面が増えたことがあげられる。これらの変化により，中年層では形式と用法が相互に関連しながら丁寧語化しつつあることが指摘できる。

７．まとめと今後の発展

本稿では，奄美大島龍郷町浦方言の敬語法を全国共通語の敬語法との比較を通して，動詞を中心とした形式と用法の観点から記述を行った。１節で述べた「中年層の敬語の間違い」は，６節で詳述したように，丁寧語接辞 /-jor/ の用法が広がり，今まで自立形式が存在するため後接できなかった動詞にも /-jor/ が後接できるようになった結果だと考えられる。具体的には，(13)（14）のように，「行く」の自立形式として /ʔimori/「いらっしゃる」を用いる場面で，老年層にとっては「自分や目下の行為・状態」に用いる丁寧語接辞 /-jor/ を，中年層が尊敬語を用いている意識[10]で /ʔikjori/（動詞の常体＋ -jor）「行きます」で代用させた用法の「間違い」である。しかし，/ʔikjori/ の形式は，中年層では目上に対しても用いられるため，単純に「間違い」とは言えない。接辞 /-jor/ における用法の世代差である。調査より，中年層から「モリ（/ʔmori/）[11] より，イキョリの方が丁寧に聞こえる」との意見が得られている。話者の意識としても自立形式 /ʔimori/ の敬度は低下しているようである。用法の変化が起こっているとは言え，「年齢」の基準も中年層では大切にされているため，「失礼に当らないように，使い慣れている共通語敬語法を使う」という心理が働く。このことも，敬語法の共通語化を促進させている要因の一つだろう。

これまで，辞書的な説明や特異な項目の記述に偏っていた敬語法の研究であったが，体系的な記述を目指すことで，各項目や文法事象を関連させながら共時的・通時的な考察を進めることが可能となるだろう。共通語との比較を通して，共通点と相違点を整理することで，浦方言敬語法を概観できたのではないかと考える。しかしながら，先行研究にあげられている敬語法や話者との面接調査を重ねる過程で判明した使い分けなどを考慮したとはいえ，主に共通語の枠組みに対応させ調査したため，まだ拾い上げられていない個別的な特徴を見逃しているという可能性もある。

今後は，現在行っている奄美諸島敬語法調査を通し

て，地域差や人間関係に基づいた場面の使い分けだけではなく，「公・私」「個人・複数」「祈り」などの場面差にも配慮した調査を行う必要があるだろう。また，それらを整理することで琉球方言全体における，浦方言の敬語法の位置付けを再度行いたい。

【注】

1）現在，町博光氏とともに奄美大島をはじめ奄美諸島敬語法調査を進めている。本稿で扱う資料は同一の調査票を用いているが，調査・文字起こし・分析は筆者が行っている。責任は筆者が負うものとする。

2）調査において80代の話者でも，使い分けの基準は意識されているものの，実際の回答として敬語形式が体系的に得られにくい話者も存在する。老年層より「自分自身は敬語を使われる立場で，日常的に敬語を使うような相手（目上）や場面が少ないため，忘れてしまう」との意見が多く聞かれる。老年層における敬語の使用場面の減少は，下の世代の方言敬語に触れる場面の減少にもつながっている。

3）琉球方言の方言区画は，主に上村（1992：779）を参照としている。

4）奄美大島方言は，奄美大島本島で話されている方言を主に指す。南部の瀬戸内町には，加計呂麻島，請島，与路島があり特異性が認められるが，この3島も瀬戸内町方言の下位区分として含められる。

5）浦方言の敬語の使い分けの基準となるのが「年齢」である。「年齢」よりも「社会的階層」が優先されるが「社会的階層」を含めると複雑となる。そのため，基本的な「年齢」による使い分けを基準として「目上」「目下」を設定し，敬語形式を取り出す。

6）例えば，母音と半母音の前に立つ声門閉鎖音は /ʔ/，子音音素の破裂音や破擦音に認められる喉頭化子音などは /ˀ/ や /ʔ/ で表記されることが多い 。

7）奄美方言では終止形にはいわゆる ri 語尾終止形と m 語尾終止形の 2 形式あるとされる。上村（1992：805）では，「m 語尾の形が，話し手のその場での判断や意志の決定を表明するのに対して，ri 語尾の形は，話し手にとって既知の事実，決定ずみの事実を表明するといった区別がある」との説明がある。本稿では，それぞれ終止形1・終止形2と表記する。

8）「＊」は，その例文が非文であることを示す。

9）現段階では，/ukagï/「おかげ（お蔭）」のみが確認されている。

10）/ʔikjori/ について中年層は，「自分に敬語を使っておかしいね」との感想を述べる話者も多い。尊敬語の機能をもつものとして使用していると考えられる。

11）中年層では，/ʔimori/ ではなく，語頭の /ʔi/ が脱落した /ʔmori/ が用いられる。

【参考文献】

岩倉市郎（1932）「喜界島に於ける敬語法」『旅と伝説』第５年第２号，三元社，pp.65-66

上村幸雄（1992）「琉球列島の言語」『言語学大辞典　第４巻　世界言語編』三省堂，pp.771-891

長田須磨・須山名保子・藤井美佐子（1980）『奄美方言分類辞典　下巻』笠間書院

菊地康人（1994）『敬語』角川書店

金城朝永（1931）「方言に於ける敬語法（第２回例会記録）」『旅と伝説』第４年12号，三元社，pp.69-74

国立国語研究所（1963）『沖縄語辞典』国立国語研究所

国立国語研究所（2006）『方言文法全国地図解説６付資料一覧』国立国語研究所

柴田武編（1984）『奄美大島のことば：分布から歴史へ』秋山書店

寺師忠夫（1985）『奄美方言，その音韻と文法』根元書房

仲宗根政善（1976）「宮古および沖縄本島方言の敬語法－『いらっしゃる』を中心として－」『沖縄　自然・文化・社会』九学会連合沖縄調査委員会，弘文堂，pp.491-502

西岡敏（2002）『沖縄語首里方言の敬語体系』東京大学大学院人文社会系研究科，学位論文

西岡敏（2003）「沖縄語首里方言の敬語付き動詞」『琉球の方言』27号，法政大学沖縄文化研究所，pp.97-137

日本放送協会（1972）『全国方言資料　第10巻　琉球編Ⅰ』日本放送出版協会，pp.83-133

法政大学沖縄文化研究所（1976）『琉球の方言　奄美大島宇検村湯湾方言』法政大学沖縄文化研究所

藤原与一（1978）『昭和日本語方言の総合的研究第一巻　方言敬語法の研究』春陽堂

藤原与一（1979）『昭和日本語方言の総合的研究第二巻　方言敬語法の研究　続篇』春陽堂

町博光（1984）「西表島舟浮集落の方言敬語法」『広島女子大学文学部紀要』第19号，pp.49-57

町博光（1997）「鹿児島県大島郡与論町朝戸方言の待遇表現」『方言資料叢刊　第７巻　方言の待遇表現』方言研究ゼミナール，pp.224-229